

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 6 月 10 日現在

機関番号：34504

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2015

課題番号：24652010

研究課題名(和文)「隣人愛」の再定義：文献研究と生態心理学実験に基づくキリスト教的倫理研究

研究課題名(英文)Redefining Neighborly love

研究代表者

柳澤 田実 (YANAGISAWA, Tami)

関西学院大学・神学部・准教授

研究者番号：20407620

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、キリスト教が推奨する援助行為を、知覚と行為という観点から再定義することを目的とする。こうした観点から見た時、新約聖書が示す援助行為は、行為の選択肢が極端に狭められている人間の行為可能性を回復し、また増大するための援助と解される。これは援助行為を他者への共感や模倣に根拠づける今日の発達心理学とは異なる方向性の理解である。生態心理学に基づく諸実験結果を参照するならば、こうした援助行為を可能にするのは、他者の行為を「充たされざる意味」として知覚することである。同時に、目的によって分節化される行為の「意味」は必ずしも自明ではなく、他者との相互行為のなかで作り上げられていくことも確認された。

研究成果の概要(英文)：This study aims at redefining helping acts as a coupling of specific perceptions and actions. From this point of view, helping acts that are showed in New Testament, seem to recover and increase the possibilities of actions of the persecuted people. This understanding is different from the way of thinking the mainstream of the developmental psychology takes today. Based on the experiments of the ecological psychology, to perceive the others actions as 'unfulfilled meanings' is the way to help these others effectively. At the same time, it became clear that the 'meaning' of actions, which is segmented according to the purposes of actions, are not necessarily evident and made in the interactions with others.

研究分野：宗教学

キーワード：キリスト教 倫理 援助行為 利他性 生態心理学

### 1. 研究開始当初の背景

欧米の学界においては、近年の脳神経科学の目覚ましい進展を受け、人間の文化的営為を認知や進化という観点から明らかにしようという動きが活発化している。Pascal Boyer や Justin Barrett など、実験的手法を用いた実証科学的な宗教研究も増え、宗教における利他性の解明を目指す研究も見られるようになった。これらの研究の多くは、キリスト教が提唱する利他性や愛を進化論的適応によって説明する。他方、「隣人愛」が実際に生じるメカニズム、すなわち他者を目の前にした際にどのようなプロセスを経てそれが生じるのかについて、実験を用いて解明する研究は未だ存在しない。これは、宗教を、超越者の表象や非日常的な信念の獲得という要素から理解しようとする、欧米の学者に共通する態度に起因する。すなわち彼らの多くは、キリスト教における愛や利他性もまた、他者によって直接喚起されるというよりはむしろ、予め獲得している神表象や信念に基づく意志や判断に基づくと考える。こうした愛の理解は、古代、中世の神学・哲学の議論によって形成され、欧米の学者たちの常識となっている。しかしながら、キリスト教の「隣人愛」を具体的に例示する『ルカによる福音書』第10章の「よきサマリア人のたとえ話」を字義通りに読むならば、**愛とは他者に近づくことによって強い情動が喚起されることにより初めて実現するものである。こうした事実をふまえるならば、現実の他者をどのように知覚することが利他的な援助行為に繋がるのか、あるいはいかなる行為が情動を誘発するような知覚を実現するのか、という問題は愛の条件として決して度外視できないのではないだろうか。**こうした問題意識に立ち、本研究では、文献研究と生態心理学の手法に基づく実験を総合することにより、知覚と行為という観点から、あえて行動主義的に「隣人愛」を捉え直すことを目指す。「隣人愛」を成り立たせる他者の知覚を明らかにして初めて、こうした利他性を提唱する宗教の特異性に迫る研究が可能になると考える。この着想は、新約聖書から初期教父に至るまでの「愛」の理解を、イエスの具体的な身体的行為を伴う実践が抽象的な概念として「内面化」されていくプロセスとして読み解く過去の研究「初期キリスト教思想における行為とその抽象化」若手研究(B)(課題番号：19720018)に基づいている。

### 2. 研究の目的

本研究は、新約聖書をはじめとする文献の研究と生態心理学に基づく実験の両者によって、キリスト教の根幹をなす「隣人愛」を知覚と行為という観点から解析し、**他者を愛することとはどのような仕方**で他者を知覚し、**どのような仕方**で行為することなのかを解明することを目指す。これは、従来の神学的・哲学的理解においては、人間の内面性や

意志、あるいは超越からの働きかけによって基礎付けられてきた「隣人愛」を、今日の経験科学によって、いわば行動主義的に定義し直すことである。このように特定の信仰体系を離れても訓練や模倣が可能な仕方では「隣人愛」を捉え直すことにより、本研究は、他者への無関心が蔓延する現代日本において、**他者のために行動できる人間を育成する方途**についても見通しを立てることを同時に目指している。

### 3. 研究の方法

キリスト教的な援助行為である「隣人愛」の再定義を目指す本研究は、(1)文献研究、(2)その成果をふまえた、生態心理学の手法による実験・分析、そして(3)両者の成果をふまえた総合的な考察によって構成される。文献研究の内容は、新約聖書、『聖ベネディクトの戒律』、マザー・テレサの諸著作のなかに見出される、利他的行為に関わる知覚と身体的行為のリスト作成、代表的なキリスト教神学における愛の定義の検討、利他性および愛に関する経験科学に基づく先行研究の検討である。実験は、「隣人愛」の実践の一つである看護を対象とする。研究協力者である早稲田大学人間科学部の三嶋博之准教授の指導のもと、看護現場での看護者の視線を捉える眼球運動計測装置による画像、看護の場面を第三者的視点から撮影したビデオ映像、さらに看護者に対するインタビューという三つのデータを総合的に解析し、「隣人愛」を知覚と行為という観点から再定義する。

### 4. 研究成果

本研究は、「隣人愛」と表現される、キリスト教が推奨する援助行為を、知覚と行為という観点から再定義することを目的とし、文献研究と心理学実験を総合する方法を用いる予定であった。しかし、議論を深めていくにあたり、当初の予定とは内容を変更し、実験よりもより哲学的・原理的な議論の整理に多くを割くこととなった。以下、変更点について、最初に述べておきたい。

第一に、当初は福音書などのキリスト教のテキスト読解を中心的に行う予定であったが、むしろ生態心理学の先行研究の確認および、生態心理学に基づいて倫理がどのように捉えられるかについての考察に多くを割くこととなった。この作業に多くの時間を割いたのは、そもそも生態心理学に基づく研究のなかで、倫理や道徳といった規範に関する研究がまだ数が多くないことから、先行研究をふまえ現時点でどのような可能性があるかを明らかにしておく必要があったからである。

第二に、研究計画の時点では、どのような視知覚が援助行為を可能にしているのか、眼球運動計測装置などを使用して実際に記録し、分析することになっており、早稲田大学

人間科学部にてアイマークレコーダーの使用方法についてレクチャーも受けたが、第一の作業を遂行するにあたり検討すべき問題が新たに顕在化し、そのためにはまず記録映像の観察から入ることが有効であると思われるため、実験に関しては記録映像の観察を行うこととなった。

以上のことを前提に、具体的な成果を述べることとする。

(1) 生態心理学の古典である J.J. ギブソンと E. リードの議論を読解し、生態心理学のなかで提示されている、またしばしば前提となっている倫理観とは何かについて考察を行った。その結果明らかになったのは、生態心理学における倫理的行為、すなわち援助行為とは、他者の行為を「充たされざる意味」を充たそうとしているプロセスとして適切に知覚すること、その知覚に基づいて他者の意図する行為を予期することによって実現するということである。すなわち、援助行為とは、行為の選択肢が極端に狭められている人間の行為可能性を回復し、また増大するための援助と解され、これは福音書に記されたイエスの援助行為と重なって見える。それは規範に従うという、いわゆるカント以降の義務論とは異なるし、また今日の発達心理学がしばしば依拠する「共感」や「模倣」に基づく利他的行為理解とも異なる、反射的な知覚と行為のカップリングとして捉えられるべきものである。E. リードは、養育者が子どもの周囲に形成する援助的空間のことを「促進行為場」と呼称している。生態心理学が目指すのは、社会のなかで、その成員同士が互いの成長や行為可能性の増大を援助しあえるような「促進行為場」を作り出すことだと言える。またこうした他者の行為を予期する知覚は、私たちの日常的行為の基盤をなす直接的な知覚経験と行為の学習によってのみ育まれる。それゆえ、生態心理学から導き出される、人が倫理を学習する方法とは、生活を愛し、生活のなかで直接的な知覚経験と行為の学習を豊かに実践することだと結論付けられる。

(2) 発達心理学者マイケル・トマセロは、人の援助行為や協力の条件として、「私たち we-ness」志向と目的の共有の成立を挙げている。トマセロによれば、たとえば集団で狩りをする動物は一見共通の目的に向けて連携しているようにも見えるが、これらの動物は、前もって共有したゴールやプランなしに、それぞれが獲物を捉える可能性を最大化しようとしているに過ぎない。(1) で明らかになった生態心理学的観点から再定義された援助行為においても、他者の行為を「充たされざる意味」として知覚するためには、「充たされる意味」としての何らかのゴールがそこに想定されているように見える。しかしながら、果たして行為の目的というものは行為

を行うにあたって他者と共有可能なほどに自明なものなのであるか。また、生態心理学者 E. ギブソンは、行為は、たとえば料理をするという行為に包丁で素材を切るという行為が入れ子になっているように、全て入れ子状になっていると指摘しているが、こうしたことを考えるならば、行為の「目的」も当然複数のレベルで考えられ、その意味でも自明ではない。以上の問題について考察するために、人々の協働性を、日常とは少しずらしたセッティングで行って記録する作品を制作している田中功起の映像作品(2013年のヴェネツィア・ビエンナーレ「抽象的に話すこと - 不確かなものの共有とコレクティブ・アクト」に出展された作品を中心に)を分析した。田中の作品では、ピアノを弾く、髪を切る、陶芸をするといった、何らかの物質・素材があり、その物質を専門的に扱う身体技能を持った人たちによる協働制作が多く取り上げられている。こうした物質とそれを扱う身体技能を持つ者同士の協働では、話し合いによる目的の明確化はほとんど意味を持たず、「ピアノを弾く」という目的というよりは当初のセッティングのみがあり、具体的な目的はその身体技能に支えられて予想しえない方向へと創発していく。これに対して、詩を作るといった言葉による協働制作においては、話し合いによる目的の拘束がきつく、対立の解消が困難である状況が確認された。同様の現象は、2016年に発表された、身体技能を持たない者同士の協働性をテーマにした作品でも際立っていた。以上のことからわかるのは、物質を介した協働制作において、その協働制作というセッティングを崩さないという意味における「私たち」志向は確かに存在していると言えるが、行為の目的についてはその相互作用のなかで多様に変形しうるものであり、その意味での明確な共有はなされていないということである。

(3)(1)(2)の研究に基づきつつ、乳幼児の「走ること」と「食べること」に関する規範学習の観察を、J. ギブソンの社会心理学論文(Gibson, J. J. (1950). The implication of learning theory for social psychology, In J. G. Miller (Eds.), *Experiments in social process: A symposium on social psychology* New York: McGraw-Hill, pp. 147-167) を参照しつつ行った。「走ること」については、保育園で徒競走の学習を行っている様子を研究代表者が記録したものであり、「食べること」については、『アフォーダンスの視点から乳幼児の動きを考察: 動くあかちゃん事典』(小学館、2008年)を使用した。言葉を字義的に正確に解さない乳幼児にとって、行為の目的を明確にした上で、そこに「すべき」という価値が加わった規範を学習するプロセスは自明ではない。乳幼児は基本的にただ走り、ただ食べるのであり、周囲の環境を自らの身

体を介して上手に利用することによって「よく走ること」、「よく食べること」(ギブソンはこれを expedient behavior と呼ぶ)を次第に学習していく。それとまた別の段階として共同体によって共有された正しさ=規範としての「しかるべく走ること」、「しかるべく食べること」(ギブソンはこれを proper behavior と呼ぶ)という段階がある。この規範学習には当然養育者が積極的に関わっており、そこで養育者が明確に禁止するのは、やはり目的の逸脱であることは明らかであった。しかし、同時に興味深いのは、乳幼児がこの目的の逸脱の禁止、とりわけ言葉を通じた禁止にほとんど従わないということで、こうした規範的行為 (proper behavior) も何らかの仕方では環境内の価値を身体によって上手に採掘する expedient behavior に繋がってこそ、適切に学習されるのではないかということが予測された。この結果を、青山慶の他者の意図を環境内の配置に読み取っていく乳幼児の研究 (青山慶・佐々木正人・鈴木健太郎 (2014)「他者の意図理解の発達を支える環境の記述：母子によって繰り返される積み木遊びに注目して」、『認知科学』VOL. 21, NO. 1, 2014 年、125-140 頁)と総合することにより推測されるのは、この proper behavior を expedient behavior に繋ぐ、あるいは翻訳する作業は、乳幼児と養育者の相互行為のなかでこそ可能であろうし、その相互行為のなかで目的が共に作られるという捉え方ができるのではないかと予想される。今後はこのプロセスの精緻な観察と分析が望まれる。

(4) 上述の研究では、直接的な知覚と身体技能による習得のなかに、新たな目的を他者と共に作り出していく可能性が見出されていた。しかし、福音書に立ち返るならば、イエスが他者とともに物質を介した協働作業を行っていることは、共食など以外にはほとんど存在せず、やはり言葉を介した対話こそが中心になっていることは否定できない。この対話のなかでイエスは確かに「教える」という態度を取っているが、同時に例えばヨハネ福音書第4章の「サマリアの女」のやりとりでは、相手が語った言葉を用いながら自分の語りたことへと比喩的につなげ、更に相手の語りを引き出すという方法を採用しており、一方的な教育や誘導とは異なる言語行為のように読める。こうしたイエスの語りとの類似性において興味深いのは、1980年代に始まり、2000年代に入って世界中で注目されているオープンダイアログ療法である。主に統合失調症の治療に成果を上げているこの精神療法では、治療を目的に置かず、また予め何かをプランすることなく、ただ疾患を被っているクライアントが自らの置かれた混乱に新たな言葉を与えるための会話が行われる。言葉による協働作業として、またとりわけその対話のなかで目的が敢えて括

弧に入れられ、ただ新しい言葉を創造するというプロセスに専念するという点において、この療法についてのさらなる分析とイエスの問答法との類似性の検討が重要であることがわかった。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計3件)

柳澤田実「行きずりの生にひらく」、『ユリイカ』第47巻第12号、2015年、201-205頁 (査読なし)。

柳澤田実「家族：原因でも処方箋でもなく想像の場としての」、『ユリイカ』第47号第19号、2015年、103-110頁 (査読なし)。

柳澤田実「『善い話』をやめる」「『ばらばら』と『まとまり』」(前後編に分かれているが、全体で一本の論文になっている)NTT出版 web magazine Webnttpub、2015年、<http://webmag.nttpub.co.jp/webmagazine/82/> (査読なし)。

〔学会発表〕(計4件)

柳澤田実「<よく動く>と<べく動く>の<よく>と<べく>は何を根拠に成立するのか」日本現象学・社会科学会第31回大会、立正大学(東京都品川区)、2015年12月6日。

柳澤田実「身体から理解するキリスト教」日本基督教学会、第62回学術大会、関西学院大学(兵庫県西宮市)、2014年9月10日。

柳澤田実「利他性への生態心理学的アプローチ」日本生態心理学会第5回大会、豊橋技術科学大学(愛知県豊橋市)、2014年7月13日。

柳澤田実「日常的生のなかの自己・身体・他者」大阪大学最先端ときめき推進事業、大阪大学(大阪吹田市)、2012年10月22日。

〔図書〕(計1件)

河野哲也、柳澤田実ほか『倫理：人類のアフオーダンス』東京大学出版会、2013年、334頁(267-290頁)(論文「可能性を尽くす楽しみ、可能性が広がる喜び：倫理としての生態心理学」)。

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

柳澤田実 (YANAGISAWA, Tami)

関西学院大学・神学部・准教授

研究者番号：20407620